

特別支援学校における幼稚園への支援 —幼稚園教諭と協働で行う出張幼児教室の実践—

景山 陽子*・馬場 信明*・小林 倫代**
(*東京都立小岩特別支援学校) (**教育支援部)

要旨：特別支援学校教諭（特別支援教育コーディネーター）が幼稚園に出向き、出張幼児教室を行った。そのプログラムは、①はじまりの歌、②スケジュールの確認、③からだ遊び、④手遊び・パネルシアター、⑤親子リトミック、⑥バルーン、⑦さよならの歌である。幼児教室を幼稚園の場で行うことで、幼児と保護者が安心して活動できる様子が見られるとともに、本校教諭は幼稚園教諭に園における具体的な支援方法を提供すること、幼稚園教諭は園の他の教諭と支援の方法を共有することができた。また、幼児教室の運営を幼稚園教諭とともに協働して進めることで、幼稚園教諭は園では見られない子どもの様子や親子関係を理解することができ、本校教諭は幼児教育における遊びを通じた指導や教材について学ぶことができた。今後の課題として、幼児教室を経験した子どもを就学相談へどのようにつなげていくのかという地域のシステム面での検討と、小学校あるいは小学部に進んだ子どもの支援の連続性についての追跡調査を事例として進めていくことが考えられた。

見出し語：センター的機能、幼児教室、保護者支援、特別支援学校、幼稚園

I. はじめに

平成17年の中央教育審議会「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」の答申で特別支援学校のセンター的機能が明示されて以来、特別支援学校は、地域のセンター的役割を推進してきており、幼児期の支援や就学移行期の支援も積極的に行っている。幼稚園等を訪問してサポートプランを作成したり（井上ら、2008）、幼稚園や保育所の教職員を対象に研修会の実施や5歳児健診に参画したり（門脇、2012）して、早期からの地域支援を進めている実践は多く報告されている。また、特別支援学校に相談室を設け地域の乳幼児に対する相談を実施したり、幼児のグループ指導を通して子どもの社会性を育てるとともに、保護者への支援も進めたりしている実践も各地で進められてきている。たとえば、田口ら（2007）は、特別支援学校において発達障害幼児のための就学に向けたグループ活動を通して、幼児と保護者への支援を進めた実践を報告している。柳生ら（2008）も特別支援学校で幼児発達相談室の取組を紹介している。また、東京都立あきるの学園では市の保健相談所を会場に幼児教室を開催

して幼児と保護者への支援を行っている。北九州市立八幡特別支援学校では、平成20年度から「たかのすチャレンジスクール」を設定して幼児・保護者への支援と小学校への移行支援を行っている。

このように各地で幼児の小グループの活動を設定して幼児とその保護者への支援を進めている実践が行われてきている。東京都立小岩特別支援学校（以下「本校」）でも、同じような活動を進めていく中で、私立幼稚園を会場にした幼児教室を実施するようになった。本稿では、それまでの経緯を含め出張幼児教室（かんしちひろば）の実践を報告する。

II. これまでの取組

幼児の教育相談や、区の就学相談に関わる中で、「区内に療育機関が少なく、なかなか子ども達が通えるところがなくて…」、「子どもの事をどこに相談にいったらいいのか？」という保護者の悩みの声がよく聞かれた。そこで就学前の幼児や保護者がどのようなニーズを持っているかを探り、本校が地域に求められている「特別支援学校のセンター的機能の役割」が何かを検討する一つの試みとして、平成18年

夏に「親子で遊ぼう会」という活動を行った。これが現在まで本校で継続的に実施している「幼児教室ぴっころっく」の原点である。『ぴっころっく』は、ピッコロ（イタリア語で小さいという意味）とロック（英語で岩）を合わせた愛称（造語）で本校『小岩』を表し、小岩で学ぶ子ども達一人一人が幸せになれることを願って名付けた愛称である。

平成20年度からは、本校で実施している『ぴっころっく』の開催場所を区立幼稚園に移し、幼稚園教諭と協働で行い始めた。出張幼児教室は区立幼稚園のなかで広がり、現在では「しかもとひろば」、「こいわひろば」、「しのぎきひろば」と3つの区立幼稚園で行っている。

平成19年度に幼児教室「ぴっころっく」を知らせるリーフレットを、区立の療育施設である育成室と、公立・私立の全ての保育園、幼稚園に送付した。このリーフレットを見て、本校の幼児教室を見学され、園児の保護者に「ぴっころっく」があることを紹介したのが私立A幼稚園のB主任である。その園児は、「ぴっころっく」に参加するようになり、その後、育成室を経て本校に入学した。B主任は、学校公開等の機会を利用し、入学後の児童の様子を気かけ本校に足を運んでくださった。

本校では、平成23年度、東京都の「適切な就学を推進する都立特別支援学校の教育相談充実事業」の指定校の一つとなった。江戸川区教育委員会学務課との協議を通して、適切な就学を推進していくための課題の一つとして、私立幼稚園・保育所における障害のある幼児や配慮が必要な幼児や保護者への支援、園の教職員への支援を進めることがあげられた。私立幼稚園との連携をどのような方法で行えばよいのかと模索していた時、私立A幼稚園のB主任のことが思い出され、私立幼稚園との連携の第一歩は、私立A幼稚園と考えた。まず行ったことは、園での子どもたちの生活や学習の様子を参観し、私立幼稚園が特別支援教育のセンター校である本校に求める支援は何であるかを把握することであった。これが私立A幼稚園との連携の始まりである。本稿では、この私立A幼稚園での出張幼児教室の実践を報告する。

Ⅲ. 「出張幼児教室」の取組

1. 「かんしちひろば」の実践

1) 「かんしちひろば」誕生

私立A幼稚園を訪問し、園長先生やB主任から園の状況を伺うと、この春入園した3歳児に、入園前にはわからなかったが配慮の必要な幼児が数多く在籍していて、園での教員の配置の工夫だけでは難しい状況があることが明らかになった。そのため、園児の様子を実際に見て支援の方法を伝えてほしいとのことであった。筆者は、園を訪問しての巡回相談支援が可能なことや教室環境の工夫等をその場で具体的に提示して説明した。そして、もう一つ進んだ方法として、本校がこれまで、区立幼稚園と連携して行ってきた『出張幼児教室』について説明し、私立A幼稚園でも実施が可能か相談を始めた。

この後、巡回相談支援として3回園に出向き、配慮が必要な幼児への支援や活動に合わせた工夫をその場でできる範囲で提供した。具体的には、順番を待つ時の見通しのもたせ方、道具箱やロッカーを整理するための支援の方法、運動会等での定位置で演技するための工夫等である。また、次回までに提供できるものは何であるかを考え、待ち時間の視覚化や気持ちの切り替えに有効なタイムタイマーの利用、机上で集中して行える教材の貸し出し等、すぐに園の活動で役立つような支援の提供に心掛けて巡回相談支援に臨んだ。

この3回の巡回相談支援の後、私立A幼稚園と今後の支援の進め方を相談し、配慮が必要な園児の保護者に対して、保護者が不安にならないよう配慮し、「小岩特別支援学校の先生がくるので遊びにきませんか？」という誘いかけをして『かんしちひろば』を出張幼児教室として行うこととなった。

2) 特別支援学校としての工夫

本校の幼児教室「ぴっころっく」は、コーディネーターを中心に、第1学年所属の教員が担当し、1年生の児童が下校した後の時間に行っている。出張幼児教室についても、同様にコーディネーターと第1学年所属の教員で園へ出向いて行っている。私立A幼稚園に出向く教員は、3名である。その3名は、

幼稚園教諭と協力し、リーダーとなる活動を分担して運営している。また、幼児の集中をなるべく切らすことのないよう静的な活動と動的な活動を組み合わせるために、事前に電話やファックス等で相談してプログラムを構成し、当日に備えている。幼児教室に参加する幼児が楽しく見通しをもって参加できるのは、こうした丁寧な準備があるからである。

3) 「かんしちひろば」の対象園児と目的

参加対象の園児は、巡回相談支援で出会った園児のほか、教員が日ごろの活動で気になっている幼児の保護者に呼びかけ、当日の参加へとつなげている。今年度は、8名の幼児が対象となっている。

「かんしちひろば」は、幼児が楽しい活動を通して人と関わる経験を増やし関わり方を学ぶことを主眼としているが、ひろばの活動を通して配慮の必要な園児への接し方を幼稚園教諭が学ぶ機会とすること、園児の実態を幼稚園教諭・保護者が共有すること、幼稚園教諭や保護者からの相談に本校教諭が対応すること等を目的としている。

4) 実際のプログラム

プログラムは7つの項目で構成されていて、園児の集中力の持続を考慮し、「静的な活動」と「動的な活動」を交互に取り入れた構成としている。また、園児が本校教諭とスムーズにコミュニケーションが取れるように、最初の20分は園児の好む玩具等を幼稚園教諭が設定し、そこで設定遊びを行っている。慣れた場所で慣れた玩具・玩具で自由に遊ぶことで、緊張も解け安心して遊ぶことができるようになってくる。

本校教諭は特別支援教育の専門家として、幼稚園教諭や園児や保護者とコミュニケーションをとり、相談の時間としても活動している。また、園児の保護者にとっては本校教諭と子ども達の関わり合いを実際に見ることで、我が子への関わり方に少しでも参考になればと思っている。遊びの終わりの時間になる



写真1 設定遊び



写真2 設定遊び

と音楽を流して合図し、園児が夢中になっていた遊びを自分で止め、集まることが意識できるようにしている。この後は、一人一人が自分の椅子に座って集団遊びを行う。保護者に配っているプログラムを **図1** に示したが、活動ごとに簡単なねらいを載せながら活動の内容を紹介している。

かんしちひろば プログラム

前回は新しいお友達も加わりにぎやかなスタートでした。まだまだ不安なお子さんもあるかもしれませんが、参加は、ゆっくりで大丈夫です。今回もお子さんの様子によって、柔軟に組み立てていきます。また、ご相談等ありましたらいつでもどうぞ！

15:15～ 受付
玩具や道具で 自由に遊びましょう。

15:30～ 曲に合わせてお片づけ～

1. お名前よび 「みんなのひろば」
・ 歌に合わせて、ひとりひとりお名前を呼びます。
★ 目を合わせる、手を合わせる、声を出す、いろいろなお返事がありますね。お子さんが気づいていない様子があれば、「はい」とお手本を見せてあげてくださいね。

2. からだあそび 「かっちゃんこ」
★ 新しい活動がたくさん入っても、多くのお子さんが楽しみにしてくれている「かっちゃんこ」は続けたいと思っています。お子さんをゆらしてあげられる今の時期に、たっぷり遊びたいですね。

3. 親子で手あそび・ふれあいあそび 「さかなが はねた！」
★ 魔法の手・・・いったいはなたさかなはどこにくっつくのかな？おしりかな・・・おへそかな・・・

4. パネルシアター 「おにぎりくんのたび」
★ おにぎりくんはいい日どこへ・・・転がっていくのかな？

5. 親子リトミック 「フーフの電車」
★ かめ・ライオン・うさぎ・うま・とんぼ・・・たくさん動物達が登場です。物まねできるかな？

★ お子さんの選んだフーフの大きさに合わせて、おうちの方が一緒に入ったり、外から車掌さんになったりして、お友達にぶつからないように動いてみましょう。音が止まることに気づけなくても、音には気づかなくても、両足がストップすることに気づけな。息なくない限り、お子さんの発見をちょっと見守ってあげてくださいね。

6. バルーン
★ 色あざやかなバルーンをもって遊んだり、大きくなったり、しゃがんだり・・・バルーンの上ののったり友達に合わせて活動したいと思えます。

～ さよならのうた 「♪ゆびとゆび」

★ 「初めて」がたたくさんだった今日の活動を、慣れた歌で しめくくりましょう。

かんしちひろばの先生方にご協力をいただき、本日は区内の私立幼稚園の先生方の研修の場としてひろばを行わせていただきました。ご協力ありがとうございました。親子で楽しく遊ばせてはいかがでしょうか・・・何かご記入がありましたら、何でもご相談ください。

図1 かんしちひろば プログラム

(1) はじまりの歌 (呼名)

目を合わせる、手を合わせる、声を出す等、いろいろな返事のしかたがあることを知らせ、どんな返事でも応じようとした様子を褒めることを保護者や幼稚園教諭に伝えている。



写真3 呼名

(2) スケジュールの確認

「はじめ」と「おわり」の見通しをもって活動に参加できるように、本日のプログラムの順番を視覚的に伝え、「カードは先生がはずします」、「椅子にすわります」等の約束事も幼児にカードを見せて確認する。



写真4 プログラム

(3) からだあそび「かっちゃんこ」

身体がまだ小さく、からだを使った多くの遊びができるこの時期に、保護者が一緒に関わりながら遊べるゆさぶりあそびの「かっちゃんこ」を行う。ここでは「やりたい気持ちの意思表示」と「順番を待つ」ことを経験することを伝えている。



写真5 かっちゃんこ

(4) 幼稚園教諭の「手遊び」、「パネルシアター」

この活動は幼稚園と事前に相談し、園児と保護者が一緒に活動できる手遊びや、集中して見る事ができるようなパネル等を依頼している。



写真6 パネルシアター

(5) 親子リトミック

椅子に座った活動の後は「動的活動」として、動物模倣のリトミックを行っている。動物の絵カードを見せながら「四つ這いの姿勢のカメ」、「高這いの姿勢のライオン」、「両足ジャンプのウサギ」、「ギャロップのウマ」、「片足立ちの静止を入れたトンボ」の5つの動物の動きを、音楽に合わせて行っている。



写真7 リトミック

フープ電車は、一つのフープに親子で入り、音楽の合図を聴いて止まったり、歩いたり、走ったりの活動を「人に合わせ、音楽に合わせて動く」ことをねらいに行っている。音楽が止んだことに気づかなくても周りの動きに気づき止まることができるか？

友達の電車にぶつからないように動くことができるか？等を行動観察の観点としている。

(6) バルーン

色あざやかなバルーンをもって振ったり、しゃがんだり、バンザイしたりと友達の動きに合わせて行動し、左右の手を意識し、左手でバルーンを持ち右手を挙げることで反時計回りの動き、反対に左手を挙げることで時計回りの動きになる。また、動くバルーンの上で動きに身体を合わせ、姿勢の保持をする等、楽しんで行える活動である。子ども達と感覚を共有できるように保護者にもバルーンを持ってもらったり、バルーンに乗ってもらったりしている。この場面でも「すわる」の絵カードを事前に見せ、約束をすることも有効である。



写真8 バルーン

(7) さよならのうた「ゆびとゆび」

最後にみんなで水分補給をして「さようなら」の手遊びを行っている。活動の締めくくりとして保護者と手のひらを合わせ、次は指を合わせ、最後に音楽に合わせて握手を行い「さようなら」を意識して終わりのあいさつを行う。

5) まとめ

このように、園児が毎日通い慣れた幼稚園で『出張幼児教室』を行い、保護者と一緒に活動することで、参加者それぞれが幼稚園での様子とは全く異なる園児の姿、教員の姿、親子の関係を見ることができたようだ。参加した保護者と幼稚園教諭の感想が驚いたことに一致していた。保護者は「今日はいつもよりずっと先生の距離が近く感じた」との感想をもち、幼稚園教諭は「いつも集団の中の一人として感じていた園児と保護者との距離が、とても身近に感じた」と感想を伝えていた。幼稚園ではほとんどの園児が園バスで通園しているので、幼稚園教諭が保護者と毎日の生活の中ではゆっくり話す時間をとることは難しい。同様に園児も集団の中の一人として存在し、幼稚園教諭との距離はみんな一緒である

ことが前提である。この“ひろば”は「ぼくの先生…、わたしの先生…」を園児も保護者も体感できる場なのではないだろうか。

“ひろば”に参加した保護者から、「公共の場での過ごし方が難しく、どのようにしたら良いのか」という電話相談を受けた。“ひろば”に参加した本校教諭全員で子どもの顔を思い出しながら支援の方法を

考え、「静かにしなさい」、「走ってはいけない」という否定的な言葉かけではなく、「ここでは本を読んでいいよ」、「絵を描いていいよ」という肯定的なカード（例：図2）を使う支援方法を「かんしちひろば」の

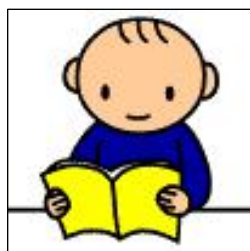


図2 絵カード

ときに提案した。その後、幼稚園教諭から、「あのカード、効きます！」と保護者からの報告を受け、園でもぜひ使っていきたいと連絡があった。このことは本校の支援が活かしたことを確認できた嬉しい知らせであった。子どもを中心に、関わる支援者全員が笑顔になることが子どもの最良の支援になることを実感した。

本校教諭にとっては、本校の児童とはまた異なる配慮の必要な幼児に対して、全てが本校の児童と接するような支援では上手くいくわけもなく、試行錯誤をしながら次のひろばに備えている。この一人一人に合わせた支援のための試行錯誤が本校教諭の力量を高めているように感じている。

IV. 考察

1. かんしちひろばを実践した成果

1) 幼稚園教諭の変容

幼稚園教諭からのアンケートに次のような感想があった。「どうしても否定的な言葉になってしまっていたが、特別支援学校の先生方の子どもに対する言葉掛けやできたことを思いっきりほめ、共に喜ぶ姿は学ぶことが多い」、「視覚支援のカードやサインで一つ一つ伝えることで、園児にはわかりやすく次の行動に移れていた」、「正しいことをした時に、それが正しいんだよ！良くなりました…正しいことをし

ている時に充分ほめ、皆がその正しいことに対して振り向けるよう促すことができたらいいなと改めて思った」等、幼稚園教諭が園児の支援方法を「かんしちひろば」の場面で学んでいる様子が見られた。

また、かんしちひろばは、幼稚園の教室で子ども達が見せる姿と、お母さんと一緒に過ごす時の姿が異なることを幼稚園教諭が再確認できる機会となったようだ。「教室での姿とは全く違い、お母さんから伺っていた落ち着かない、話を聞いていない姿が見られた」との感想もあり、保護者の困っている状況を理解し、寄り添うきっかけとなりそう。さらに、教室でも絵カード等を使用して全ての園児にわかりやすいような工夫をしている。

かんしちひろばの中心となり、コーディネーター役でもあるB主任は、年齢層の若い教員集団を引っ張る立場として、「園児への接し方の共有を図り、伝わっているだろうな！ではなく、園内支援委員会等の組織的な会議で話し合うことや心構えが必要である」という園内体制構築の思いを述べていた。

2) 保護者の変化から

“ひろば”に参加した保護者からは、「普段は関わりを嫌う我が子と、一緒に触れ合って遊ぶことができた」、「いつもは下の弟に時間をとられてしまいがちだが、じっくり兄と関わる必要性を感じた」、「親子で一緒に身体を動かしたり何かをすることがとても苦手で、毎回ちゃんとできるか心配しているが、いろいろな方法で身体を動かすプログラムの中で、一緒に動くことを楽しくできるようになってきている。集団で活動する前に思いっきり身体を動かして遊べるのも子どもにとって良い方法で、気持ちを切り換えて集団に参加することができているようだ」等の感想があった。ここから、我が子に何が必要で、明日からどうしていけばよいか、という具体的な手段が伝わっているように受け止められた。

また、「園で気持ちの整理ができない様子の我が子を見て驚いた」という感想もあった。家での一人遊びで過ごす様子しか知らなかった保護者が、園で友達と過ごす中で気持ちの調整が難しい我が子の様子を見る機会にもなっていることがうかがえる。“ひろば”への参加が保護者と幼稚園教諭との子どもの実

態の共有に繋がったのではないかと考える。

3) 本校教諭の変化

幼児教育の専門家である幼稚園教諭が行う手遊びやパネルシアターは参考になり、振り付けや生演奏を行う等の工夫を学ぶことができた。パネルを見つめる子ども達の熱い視線はとても印象的だった。

パネルのように視覚的に手がかりを与えることの有効さを改めて実感した。しかし、「視覚支援さえあればいい」わけではないことも園児に接することで実感した。本校在籍の子ども達とは実態が異なり、支援の仕方が異なるため、どのような手立てや言葉かけが有効かを考える良い機会となった。

2. 出張幼児教室の良さ

本校で行っている幼児教室「ぴっころっく」を、幼稚園や保育所に出張して行うのは、幼児教室に参加をしたいが、「特別支援学校は敷居が高い」と思っている保護者が多いと推測したからである。そこで、本校教諭が幼稚園に出向き、幼稚園で出張幼児教室を行うこととした。出張幼児教室を行うことは、次のような利点がある。

まず、保護者にとっては、幼稚園に特別支援教育の専門家である本校教諭が来ることで、なかなか相談できなかった我が子のことを、慣れた場所で気軽に相談することができる。また、場所が変わることへの抵抗感が大きい配慮の必要な幼児にとっては、いつも過ごしている幼稚園で、信頼関係のできている幼稚園教諭も近くにいるので活動できるので安心することができる。知った顔が多く、通り慣れている自分の幼稚園は、園児にもその保護者にとっても幼児教室を行うのに一番環境の良い場所である。

また、保護者からの相談に対しては、園での実際の様子を幼稚園教諭に聞きながら本校教諭がアドバイスをすることができる。さらに、本校教諭が幼稚園の教室環境を実際に見ることで、その場に合った環境の工夫について具体的な提案もできる。

2番目に、幼稚園教諭にとって、園で幼児教室を行うことは、多くの仲間の教員と一緒に支援の仕方を専門家から学ぶ機会となるため、支援の方法を共有化しやすく、園全体での日常の指導に活かしやす

い。また、幼児教室では、園での玩具や遊具を利用しているため、参加した幼稚園教諭にとっては、明日からの活動でも活用することができる。幼児教室で使用したスケジュールや約束のカードの提示は、園の毎日の生活の中でも有効に使われるようになってきている。

3番目に、本校の教諭と幼稚園教諭とが協力して幼児教室を運営するため、双方が学びあうこととなる。幼児教室のプログラムを一緒に行うことを通して、すなわち幼稚園教諭は本校から「配慮が必要な園児への支援方法のアドバイスや保護者支援の方法」を学び、本校教諭は幼児教育の専門家である幼稚園教諭から「遊び教材の工夫や手遊び・パネルシアターの技術等のノウハウ」を学ぶ機会が得られることである。

3. 学びあいの実際

幼児教室においては、使用している絵カードやスケジュールの提示の仕方、参加幼児への「はじめ」と「おわり」への見通しの持たせ方、意欲の引き出し方、順番を意識した活動、静と動を組み合わせる集中を促す活動の組み合わせ等の工夫等について、幼稚園教諭に見てもらい伝えるようにしている。また、教室終了後に幼稚園教諭の感想を聞き、参加した幼児の担任に対して必要に応じて関わり方に対するアドバイスをを行う。幼児教室での幼児の様子を共有しているからこそ、より現実的な支援の工夫等を提案することができる。

一方、幼稚園から本校教諭は次のようなことを学んでいる。幼稚園の日々の活動は、遊びを通じた指導を中心としており、幼児の身近なもので巧みに手や目を協応させる手作り教材がたくさんある。幼児教室を担当している本校教諭にとってはとても良い刺激となり、学校に戻るとすぐに教材を作成し始めることもある。幼稚園教諭からの学びは、本校の児童への指導にも活かしているのである。また、幼稚園での幼児教室に参加する幼児は、気持ちの調整がうまくいかないという面が多く見られる。本校から出向く担当教員にとっては、どのような支援やアドバイスが適切なのかを毎回考えながら支援に臨む良い機会となっている。

4. 今後の課題

本校が区内の全ての幼稚園でこの出張幼児教室を行うことは困難である。そのため今年度は、本校の幼児教室「びっころっく」を含め、全ての幼児教室を、幼稚園・保育所の教職員の研修会の場となるようにして取り組んだ。「びっころっく」は区立・私立保育所の保育士を対象とし、出張幼児教室は私立幼稚園教諭向けとして、幼稚園・保育所を会場に研修会を行った。目的は「配慮を必要とする園児への関わり方の実際を知る」、「幼稚園・保育所ならではの支援の工夫を知り、自分達の園・所での支援に活かす」ことである。このような研修会を幼児教室と並行して行う中から、保育士や幼稚園教諭の中で、その園の全員を巻き込んでの支援の検討や、日常でのその園ならではの支援の工夫を積極的に推進する指導者の出現を望んでいる。

また、これらの研修会は、障害のある幼児、配慮が必要な幼児の理解と支援のしかた、保護者への支援のしかたを就学前機関の教職員に広める一助となっている。このような支援を進めていく中で、就学を迎える幼稚園・保育所に在園する配慮が必要な幼児の保護者が、我が子の状況を適切に受けとめ、その子に応じた就学が考えられるように相談を行い、区の教育委員会と連携をしていくことも必要である。

松尾ら(2008)は特別支援学校で幼児教室に参加した子どもの事例を追跡し、支援の連続性の重要性を述べている。幼児教室を経験した子どもが、小学校あるいは小学部に進んだ際、どのような支援が必要となるのか、という支援の連続性についても追跡調査を進めていくことが必要である。

特別支援学校における早期相談・早期支援に関わる役割は、幼児教室「びっころっく」・出張幼児教室のように、幼児・保護者・就学前機関の指導者のニーズを捕らえ、支援の方法を考え、実践し、それが地域の中に受け入れられ広まることによって、保護者は安心して我が子を受け入れ、子どもはのびのびと生活し、地域の中で育つことになる。こうしたビジョンをもって、特別支援教育を進めていきたい。

引用文献

- 井上和久・西岡美智子・後上鐵夫(2008). 「サポートプラン」を活用した幼稚園・小学校等への支援の実際. 国立特別支援教育総合研究所教育相談年報, 29, 1-9.
- 門脇ゆかり(2012). 特別支援学校による幼稚園・保育所のサポートの在り方: 地域のニーズに合ったセンター的機能について. 山形大学大学院教育実践研究科年報, 3, 164-171.
- 松尾裕美・山田富美・小林宏明(2008). 幼児教室に参加した児童の追跡研究: M児の事例から支援の連続性について考える. 金沢大学附属特別支援学校研究紀要, 平成19年度, 162-167.
- 田口悦津子・高野裕美・野田智美・他(2008). 特別支援学校における「軽度」発達障害児のための就学支援プログラムの試み. 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 4, 83-91.
- 柳生美由季・吉川開・原恵一・他(2008). 本校における幼児発達相談室の取り組み: 小集団によるコミュニケーション理解と支援. 金沢大学附属特別支援学校研究紀要, 平成19年度, 152-161.

参考文献

- 柘植雅義・田中裕一・石橋由紀子・他(2012). 特別支援学校のセンター的機能. ジアース教育新社.